児童が主体的に学習に取り組む小学校高学年ゴール型授業の研究
ー内発的動機付けを図る工夫と学習としての評価(Assessment as learning)に注目してー（要旨）

身体文化サブプログラム

石坂　晋之介

【指導教員】　石川　泰成　　有川　秀之

【キーワード】 内発的動機づけ　エコロジカルアプローチ　教材化の工夫　学習としての評価(Assessment as learning)

１．研究の目的

小学校高学年のゴール型の授業実践において、内発的動機付け[1]と学習としての評価（Assessment as learning）[2]に注目しながら、主体的に学習に取り組む授業開発及びその効果検証を行うことを本研究の目的とする。

２．言葉の定義

「主体的に学習に取り組む」とは「内発的に動機付けられ、協働的に学ぶ姿」と定義する。

３　研究の方法

３．１　研究の対象

埼玉県内Ｋ小学校第６学年を対象とし、期間は2024年11月１から2024年11月25日までの計７時間とする。

３．２　研究の内容

３．２．１　エコロジカル・アプローチの採用

エコロジカル・アプローチ[3]は人と環境の相互作用の中にスキルが存在すると考え、練習環境に制約を設け、学習者本人が自分に合ったスキルを探索・発見する学びのプロセスを辿る点で、本研究における主体性と関連付けられる。

３．２．２　タスクゲームの開発

メインゲームへと学習が転移する「ボーリングゲーム」というタスクゲームを設えた。

ボーリングゲームの主なルール
①ボールを手で扱ってよい
②パスをする時は、下投げで地面を転がす
③ボール保持者はボールを持ったまま５歩まで移動できる
④ディフェンダーにタッチされたボール保持者はその場で止まってパスをする

図１　ボーリングゲームのルール

３．２．３　アウトナンバーゲーム及びオープンゴールを採用したタスクゲーム・メインゲーム

タスクゲーム・メインゲーム共に４対２のアウトナンバーゲームとし、オープンゴールを採用した。

３．２．４　学習としての評価(A as L)の導入

学習者自身が設定した課題に対して、学習者同士でモニタリングし合い、自己修正・自己調整していく学習としての評価（A as L）を導入した。

主な特徴
①兄弟チームによるペアでの活動とし、ペア同士で運動観察を行った後、互いの評価を伝え合う
②フィードバックではなく、フィードフォワードを意識し、よい動きに焦点化した声かけ「よい出し」を行う
③学習としての評価を次のゲームにおける自らの課題設定につなげる
④授業の中盤で導入し、学習としての評価後、１試合ゲームを行う展開とする

図２　学習としての評価（A as L）の行い方

４．分析方法

体育授業用動機づけ尺度の質問紙調査[4]の活用と数値の変容の分析、意図的な動きの動画分析、抽出児童の学習カードの記述分析、の３つを行った

５．結果と考察

内発的動機付けについては上昇傾向であり、意図的な動きが増加していることから、自ら見出した課題に対して、解決に向けた追求をしていたことがわかる。手立てとしてエコロジカル・アプローチという運動学習理論をもとにした教材化の工夫に加えて、学習としての評価（A as L）の活動が課題の達成状況を把握し、次の課題を適切に設定するための振り返りとなっている、あるいはその振り返りが独善的ではなく、協働的に行われている、といった効果的に機能していることが重要であることがわかった。

６．研究のまとめ

主体的に学習に取り組むため授業開発として、エコロジカル・アプローチを採用した教材化・学習としての評価（A as L）、その双方が両輪となって取り組まれることが重要であることがわかった。

７．課題

外的調整・数的劣位の状況が児童の主体性とどのように関連しているのか、検討の余地がある。

主な引用・参考文献

１）E.L.デシ. R.フラスト. 桜井茂男(1999).人を伸ばす力. 新曜社. pp201-202

２）石井英真（2023）.中学校・高等学校　授業が変わる　学習評価深化論.図書文化社.p135

３）植田文也（2023）.エコロジカルアプローチ.ソル・メディア.p34

４）藤田勉・佐藤善人（2009）. 小学生と中学生の体育授業における動機づけの比較検討.　鹿児島大学教育学部研究紀要.　人文・社会科学編、61：pp43-59